

# 神 秘 和 音

新 谷 勝 造

Mysteriouschord

Katsuzo SHINYA

## 序 論

Alexander Scriabin(1872~1915)は、神秘主義哲学に傾倒しその哲学の実践として作曲を続けた為、『神秘主義』という固有のジャンルに分類される。——春秋社出版「スクリャービン集2 伊達純・岡田敦子 編集・校訂参照

スクリャービンにとって音楽の最終的目的地は、神秘主義思想を背景とした『神との合体』であった。神秘主義哲学、及びその体系が音楽と直接的に結びつき、彼の作曲語法が開花したのは「プロメテウス—火の詩」作品60である。この作品以後しばしば使用されたハーモニーが、「プロメテ和音」もしくは「神秘和音」と言われるものである。

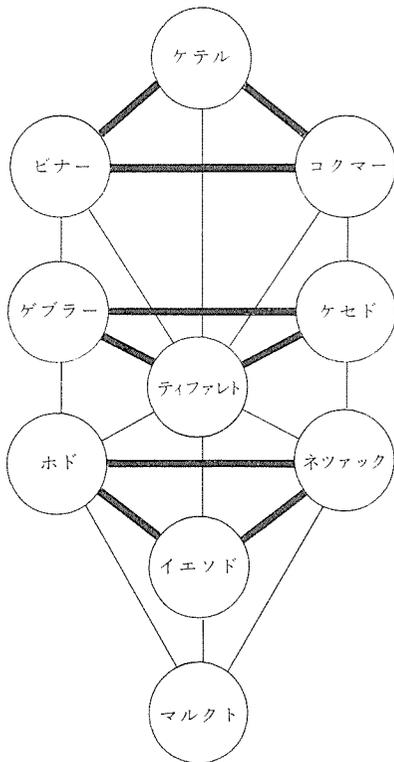
「プロメテウス」以後のスクリャービンの作品に於いて、楽曲の構造・ハーモニー・リズム等、神秘主義思想との繋がりを無視して理解することは不可能である。しかし、現在の所、神秘主義的見地からの楽曲分析は行われていない。

この論文は、神秘主義哲学がスクリャービンに与えた影響を考察すると共に、神秘和音がどのような意味をもち、いかなる過程を経て導きだされたものであるか、神秘主義思想の体系を基に解明するものである。

## I 神秘主義

神秘主義とは、科学的合理主義では解明出来ない神秘領域を宇宙感覚で捉えようとするものである。その発端は、およそ7~8万年以前原始人類が儀式への集中を行った頃に遡ることができる。B.C.4世紀頃、ナイル・インダス・メソポタミアに於いて、各々文明を通し神秘的基礎が築かれた。そしてイスラエルの王侯とエジプト祭司王との交流が行われ、ソロモン王が神殿を建てるに至った。イスラエルの神秘主義が西洋オクルティズムスの基礎を成し、教会が有強であった時代を通じ、自ずと魂が神に近づく実践的技法としてヨーガが発達した。やがてその流れは、19世紀に及んで多くの秘密結社をヨーロッパに生む結果となった。

太古より、ヘブル人の神秘的伝統として三種類の文献が伝えられていたが、それは旧約聖書・タルムード・カバラである。その内のカバラがバラ十字団・フリーメーソン等、神秘主義者達の重要な資料となった。スクリャービンが強く影響を受けたブラバツキー婦人の神秘主義体系も、これに多大な影響を受けている。



図一

神秘主義に於いて最も重要な基盤となる体系は、『生命の木』と呼ばれるものであり、神秘主義者達はその木に沿って中央の柱を登ろうと試みる。(図1) 参照

神秘主義とされる思想体系は、現在細分化され多数の宗派に分かれているが、この論文では神秘主義思想の基盤をなす『生命の木』に関する引用を、最も基本的解説書であるD・フォーチュン書「神秘のカバラ」(国書刊行会出版)から用いることにする。

スクリャービンが直接影響を受けた思想体系は、D・フォーチュンではなくブラバツキー婦人によるものとされている。——春秋社出版「スクリャービン集2 伊達純・岡田敦子 編集・校訂 参照」

またブラバツキー婦人はD・フォーチュンの思想体系に対し名指して批判を加えているが、『生命の木』を基本的体系としていたこと、また『生命の木』の基本的解釈に関しては一致をみている為、本書を引用することは妥当と言える。——ブラバツキー婦人の著作による代表的論文「テトラグラマトン」(HPB文集8巻, 140頁以下) 参照

## II 神秘和音に於ける神秘主義

### (1) 属9の和音

図2に示された和音が「神秘和音」と呼ばれるものであり、その和音構造は付加6を伴う第5音が半音下方変位された属9の和音である<sup>1)</sup>。

スクリャービンの後期の作品は、機能 and 声から離脱しているように見える。にも関わらず、支配しているハーモニーは属9である。

属9のハーモニーという概念では、基本的に主音が前提となる。

神秘主義哲学に於いて我々が置かれている物質世界(マルクト)は、上部にあるケテル・コクマー・ビナー・ゲブラー・ケセド・ティファレト・ネツァック・ホド・イエソドより成る9つの天上世界から切り離されて存在しているとされる(図1参照)。スクリャービンの神秘和音は、主音から切り離されてはいるが、主音を基盤にその上に成り立つ9のハーモニーであり、神秘主義思想による宇宙構造と同様の構造をもつ。主音は、神秘主義思想に於ける物質世界「マルクト」であり、9の和音は、マルクトから切り離されているイエソド以上の9天球であり9つの天上の世界と言える。属9の和音はスクリャービンにとって、我々の住む物質世界「マルクト」と深い関係を持ちつつも切り離された天上の9



図一2  
プロメテウス和音

天球のハーモニーを表す為に、最適なものであった。

神秘主義に多大な影響を与えたエジプト神話によると、宇宙は大地を表す男性神『ゲブ』及び、イエソド上部の9天球を総括して表す女性の天空神によって表される<sup>2)</sup>——主音はエジプトに於ける『ゲブ』であり、属9の和音はゲブの地にそっと手足を伸ばし覆い被さる天空の女神『ヌト』である。スクリャービン自身、天空を一人の女性と述べていることから、この属9の和音は天のハーモニーと考えて良い。神秘和音は、音としては表されない主音を土台とする、宇宙全体を表現する「宇宙の図式=Lebensbaum=生命の木」である。—図1参照

### (2) 下方変位された第5音

神秘和音では、第5音が下方変位されているが、この章ではその理由を考察する。

この下方変位された第5音は、主音から見ると属音（第5音）の属音（第5音）にあたる。この下方変位された音は、マルクト（主音）から見た $V + V = 10$ 。つまり第10天球「ケテル」であり、全てが発生する究極の基を表す。従って、C-Durを基本とした神秘和音に於ける第5音Dは、神もしくは光を表す音と言って良い。

神秘主義思想に於いてケテルの称号は、「隠れたるものの隠れたるもの」である<sup>3)</sup>。我々にとって、ケテルは認知できないものであり想像する以外手立てはない。ケテルは、それ自体純粹存在であるが、そのケテルの流出により全ての物質世界（マルクト）は成立する。このケテルの流出、もしくはケテルの下降なくして物質は存在しない。従って、Dの下降なくしてプロメテウス和音の存在自体ありえないと言える。

神秘主義に於いて、ケテルは『隠れたるもの』と言われる状態、あるいは存在であるが、神秘和音に於いてもそれが反映している。ハーモニーの構成音としてケテルを表すDの存在は、暗示されながらも直接音としては現れない。そのケテルであるDが下方変位し、最終的に物質世界であるマルクト〔C〕へと姿を変える。

また下方変位された音が、Desを使用せず異名同音であるCisによって表されていることは注目すべき点である。これは、ケテルから遠く隔たりを持ち異質に見える物質世界であるマルクト〔C〕が、実際には神であるケテル〔D〕の変化したものであることを表す。

また、この異名同音の使用は、後述する3組の三位一体を表す3度音程の積み重ね（3度音程による三位一体の表現法は、モーツァルト「魔笛」の台本にもみられる。）、及び宇宙の四大構成<sup>4)</sup>を表現すると思われる4度音程位置での配置を可能にした意味でも適切といえる。

### (3) プロメテウス和音の配置

図一3は、神秘和音を4度位置に並べたものであるが、神秘和音の最上音であるAの上に置かれるであろう4度音程はDである。このDは、下方変位しCisとなる以前の純粹存在としての原形ケテルである。さらに4度音程を積み重ねると、基音に戻りDより上部の4度音程の積み重ねは不可能となる。

神秘主義哲学では、ケテルは『頭上の王冠』または『隠れたるものの隠れたるもの』と呼ばれ認知不可能なものであるとされる。神秘和



図一3

音は、実質に於いて頭上に置かれるべき隠れたる最上音であるD（ケテル）によって完結されるべきものである。

スクリャービンは、このDをハーモニーの構成音としても多用した。その場合属9の下方変位された第5音は、ケテルの流出を意味し、下方変位を伴わない第5音は、ケテルの純粹存在を表す。

神秘主義思想に於いて、宇宙の図式である Lebensbaum=生命の木の構造は、上部のケテル・コクマー・ビナーにより形成される三角形によって表される三位一体、次に来るゲブラー・ケセド・ティファレットによる三位一体、そして最下部に存在するネツァック・ホド・イエソドにより形成される三位一体という三層構造を持つ一図1参照。プロメテウス和音に於いても3度位置（基本位置）に配置することにより、その構造を得ることができる。一図一2参照

#### (4) 付加された6

神秘主義哲学の究極の目的は、マルクト（物質）の世界から中央の柱を上昇し、イエソドを経過、太陽中枢であるティファレットに於いて第一次的昇華をし、ケテルに於ける『神との合体』を目指すことにある。その為、神秘主義哲学では、第一次的昇華の起こるティファレット天球（太陽）は、ケテルと共に特別な意味を持つ。

従って、『太陽への同化』、そして『神との合体』を最終目的と考えていたスクリャービンにとって、ケテルを表す第5音同様、第一次的昇華の成されるティファレットに固有の音を与える必要があった。そこで考え出されたのが、付加6の音である。

神秘主義体系によるとティファレットに与えられた数字は6である。その為プロメテウス和音に於いては第6音が加えられており、この付加された音は太陽を意味する。スクリャービンにとって、このケテル及びティファレットの音から作られる3度が、いかに神聖な重音と思えたか、想像を絶する。——“炎に向かいて”冒頭のアフタクトを参照。

また、付加6の音を記述する際『十』という印が用いられることにも注目すべきである。十は十字架であり、キリストを表す。十字架及びキリストの両者は、第6天球であるティファレットに与えられた最も代表的な象徴である。

この付加された第6音は、ケテルである第5音同様ソナタの6番以後下降するケースがみられる。全ての天球はマルクトへ向け、次第に密度を増しながら物質へと下降する。しかしこの第6音の下降はケテルの下降とは意味を異にする。

ケテルの下降は物質となる為の第1原因。全ての結果を生み出す根本原因の流出である。しかしティファレットの流出はより慈悲深いものである。エジプトの神話体系では、太陽はその本体から多数の腕を地上に向けて伸ばし、個々の腕の末端が太陽の本質である恵みをもたらす慈悲深き手として表されることがある。

神秘和音に於けるケテルの下降は、このエジプト神話に於ける太陽から差し延べられた恵み多き太陽光の精神的・物質的両面への影響と考えて良い。

和声学的アプローチから神秘和音の分析を試みると、スクリャービンの作品の中には第5音が上方変位されたと思われるプロメテウス和音が存在する。その場合、第5音の上方変位

と判断するのは、スクリヤービンの思想からして適切ではない。ケテルは全ての本質であり原形である為、上昇する性質のものではない。強引な上昇を促すとすれば、その音は実音ではなく『無際限』なる『全ての音の集合』であり『無』である『音の原因なき原因』へと集約するはずである。

したがって神秘和音に於いて第5音の上方変位が認められた際には、第6音（ケテル）の下降と見做すべきである。

#### (5) イエソドを表す音

神秘主義者にとって最も重要な天球はマルクト（地球・発心・色）・イエソド（月・修行）・ティファレト（太陽・菩提）・ケテル（天・神・涅槃・空）であり、彼らは中央の柱（王道）に属するそれらの4天球を真っ直ぐに上昇することを究極的な目的とする。

前述の項目に於いて、ケテル・ティファレト及びマルクトに当てられた音は判明した。神秘主義思想の実践に於いて究極の目的である『神との合体』を目指す為にはマルクトから出発し、先ずはイエソドを経過しなくてはならない。神秘和音の構成音の中に於いてもイエソドの存在が不可欠となる。

イエソドは下部の三位一体に属し、基礎とよばれる天球である。この天球から、我々人間を含む物質と認識できる全てのものは生みおとされる。——現在物理学に於いて半物質もしくは暗黒物質と呼ばれる性質のものはビナーの司る領域である。

従って、イエソドに与えられた音はケテル・ティファレトに与えられた音と同様に下降可能な性格のものでなくてはならない。

下降変位可能な音とし残される音は第3音及び第9音である。

イエソドは『基礎』であり、マクロコスモス及びミクロコスモスを表現する両ハーモニーに含まれていなくてはならない。しかし、後述するミクロコスモスを表す属7形の和音には属9を決定する第9音は含まれない。その為、第9音は除外して良い。

また第3音は、3度音程による基本的配置に於いて低次の三位一体を表すと思われる低部の3度音程を構成している。

前述のことからプロメテウス和音に於いては、第3音がイエソドを意味する音であると思われる。

現在の所この第3音に関しては、神秘主義思想に於いて欠くことのできない数字の裏付けがない。

#### (6) 下方変位を伴う第9音

前項で触れたが、第9音は準固有和音として度々下降をする。神秘和音が確立したピアノソナタ第6番以後多様される音であるが、何を意味するものであろうか。これは未だ推察の域をでるものではないが、純粋な形での第9音を用いたハーモニーは〔精神的な側面〕を表すものであり、準固有和音として第9音が下方変位した和音は、属9の〔精神の物質化〕を意味しているのではないだろうか。

前記のような判断を下す根拠としては下記の事項も挙げられよう。第9音は天空のハーモニー（マクロコスモスを意味するハーモニー）を決定付ける唯一の音であり、同音の下降は

『9』の下降を意味する。天空を表す『9=ヌトもしくはハトホル』の下降は物質への下降を意味する。

#### (7) 属7形の和音

スクリャービンは、属9の和音の他属7形をも多用した。しかし一般的に属7と言われるハーモニーは、属7と解釈すべき和音ではない。これは、ドッペルドミナントと見做すべきである。

スクリャービンの作品の目的は、神との合体であり、人間が属9という宇宙ハーモニーに同化することであった。その過程を表現する為には、天空を表す属9のハーモニーの他、マルクトの象徴である人間（マイクロコスモス）を表す和音を必要とした。

神秘主義哲学では、人間であるマイクロコスモスと宇宙であるマクロコスモスは本質的に同じものである。従って、マイクロコスモスとマクロコスモスを表すハーモニーは基本的に同じ構成音でなくてはならない。また、スクリャービンにとって究極的目的は、音楽に依るマイクロコスモスのマクロコスモスへの同化であるから、その表現の為にはマイクロコスモス及びマクロコスモスを意味するハーモニーは区別されなくてはならない。またマイクロコスモスは高次のものを認知することができない。そこで考えられたのが属9の和音から、その最上音である9の音を省略した属7形である。しかし属7のハーモニーの持つ概念からは、マイクロコスモス（マルクト）の概念を引き出すことはできない。

マイクロコスモスを表現する和音は、マルクト自体（主音）に与えられたハーモニーである。マイクロコスモスたる人間（マルクト）を提示する音は、ハーモニーの構成音として内包されていなくてはならない。また、イエソド上部を意味する属9のハーモニーが、マルクトを表す主音から5度上部に構成されている為、マルクトに与えられるハーモニーは、属9から5度下降した概念を持たなくてはならない。

しかし、属9のハーモニーの構成音を全て5度下降させたのでは、マイクロコスモスとマクロコスモスの和音が異質なものと化す。そこで考え出された概念がドッペル・ドミナントである。属7形の和音をドッペルドミナントと見做すことにより、このハーモニーの主音は属7の主音からさらに5度下降した音となる。従って図3に示した人間を表す属7形の和音の主音はFとなる。このFは7の和音の構成音でもありマイクロコスモス自身を意味するものである。

上述の如く、人間（マルクト）を表す属7形をドッペルドミナントと考察することにより、このハーモニーはイエソド上部の天空の和音である属9と同様の構成音を持ちながら、イエソドからマルクトまでの距離〔5度〕を下降した概念を含むことになる。

### 音に与えられた色彩

スクリャービンは、『プロメテウス』に於いて色彩を作品のなかに取り入れようと試みた。彼が音に与えた色は、図5に示す通りである。

人間の通常感覚では、異名同音は異なる色彩として感じとられる。しかしスクリャービンは表に示した如く、異名同音に同色をあてている。



図-4

Scriabin's Key-Colour Scheme

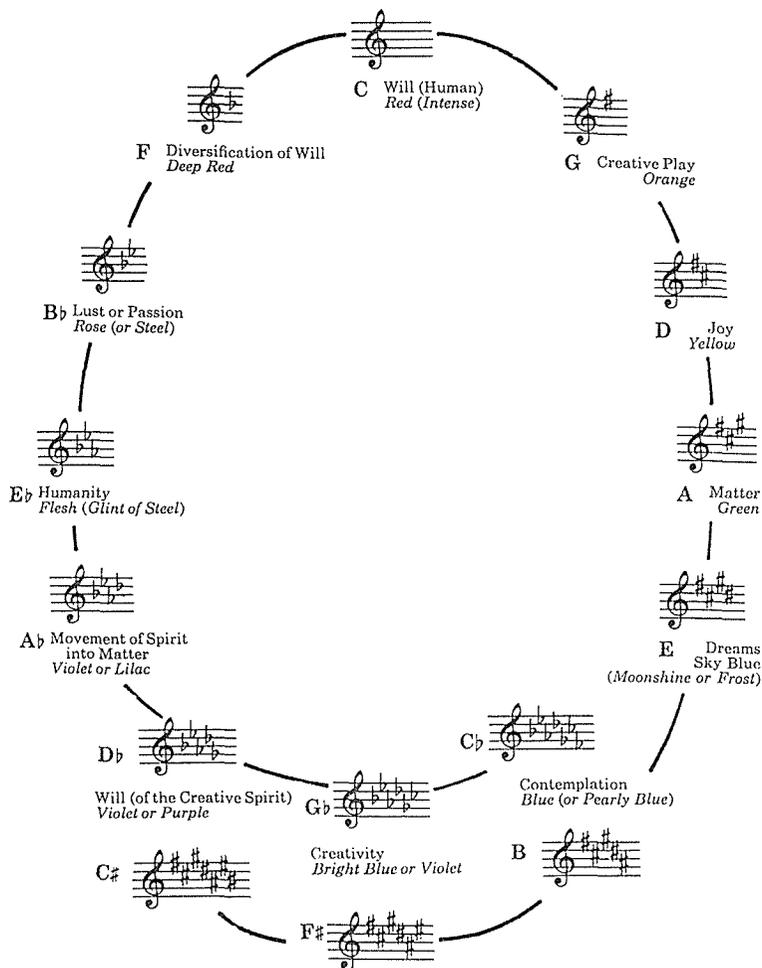


図-5 Eulenburg “prometheus”より

従ってスクリャービンが音に与えた色彩は、感覚的なものではない。また、異名同音に同色を当てる行為は、スクリャービンが異名同音を同意として捉えていたことを意味し、彼の作品を解釈する上で多大な手掛かりとなる。

ピュタゴラスの音楽論と色彩論<sup>5)</sup>を下記に引用する。

『色彩のものさしが一番下に赤を置くとすれば、これが音階の最初の音ドに相当する。この類比をすすめていくと橙はレ、黄色はミ、緑はファ、青はソ、紺はラ、紫はシにあたる。この色彩のものさしを完成させるに必要な第八番目の色は最初の色である赤の一オクターブ高い色でなければならない。上述の配当が正しいことは二つの注目すべき事実によって確かめることができる。第1は音階の三つの基本的な音程つまり第一音、第三音、第五音は赤、黄、青の三原色にあたるということであり、第2は音階の最も不完全な音である第7音は色彩の最も不完全な色で紫にあたるということである。』

以上であるが、神秘主義的思想からするとD=橙は、C=赤及びE=黄の中間に位置し両者の合成〔赤+黄〕によって作り出される。スクリャービンの体系とピタゴラスの色彩論を比較すると、スクリャービンはピタゴラスの体系を#系の5度圏に割り当てていることが分かる。

## 結 論

以上の考察の如く、スクリャービン後期の作品に於ける属9の和音は、その性質と数から宇宙全体を表す記号であり、属7形（ドッペルドミナント）は人間（マルクト）を意味するハーモニーである。プロメテウス以降、特に後期の作品に於けるスクリャービンの目的は、上記の2種類の和音を駆使し冒頭で与えられた調の和音を、ティファレト天球もしくはケテル天球に於いて属9の宇宙ハーモニーに同化させることにあった。そのハーモニーの同化こそ、スクリャービンにとって音楽による『神との合体』を意味したものである。

個々の作品の構成分析は、今後試みるつもりであるが、以上の考察を基に作品を解釈すれば、マイクロコスモス（人間）の宇宙への同化を目的とした作品ばかりではなく、彼の楽曲のなかには万物の根源から物質的な性質を引きずりだす作品も含まれることが分かる。

スクリャービンのハーモニーの構成音の意味を理解するならば、彼の作品のストーリーを言語に翻訳することが可能である。

スクリャービンのハーモニーは機能と和声から離脱を計る傾向にあると見做されているが<sup>9)</sup>、スクリャービンの脳裏にそのような意識は存在しなかったであろう。結果論的には無調音楽的性格は示したものの、和声に対する概念はシェーンベルク等による12音技法の思想とは種を異にする。

基本的にスクリャービンのハーモニーは機能と和声の理論に縛られたままなのである。機能と和声の概念と神秘主義思想の概念を念頭に置かずして、彼のハーモニーの隠された意味を理解することは不可能と言える。

以上のように、プロメテウス和音は、神秘主義思想を機能と和声に嵌めたものであり、プロメテウス以降の作品の概ねを支配する結果となった。

## 注

- 1) Scriabin Sonatas 第2巻 春秋社 参照
- 2) エジプト神話 ヴェロニカ・イオンズ著 酒井 傳六訳 青土社より
- 3) 神秘のカバラー ダイアン・フォーチュン著 大沼忠弘訳 国書刊行会出版 参照  
 神秘主義思想にはいくつかの異なる流れがある。しかし『生命の木』という概念に於いては全て一致をみている。その為これ以後引用される神秘主義概念に関しては、最も基本と思われる本書から引用する。
- 4) 四大とは、地水火風の4つの力を意味し、現代物理学に於ける強い力・弱い力・電磁気力・重力にあたると考えて良いだろう。
- 5) 象徴哲学体系II 秘密の博物誌 マンリー・P・ホール著 大沼忠弘・山田耕士・吉村正和訳 人文書院より「ピタゴラスの音楽論と色彩論」

## 6) Scriabin Sonatas 第2巻 春秋社 参照

## 参 考 文 献

- 神祕のカバラー ダイアン・フォーチュン著 大沼忠弘訳 国書刊行会出版  
 Sonatas A. Scriabin MCA  
 Sonaten A. Scriabin Peter  
 Sonatas A. Scriabin 春秋社  
 VERS LA FLAMME A. Scriabin International  
 エジプト神話 ヴェロニカ・イオンズ著 酒井傳六訳 青土社  
 オカルト コリンウイルソン著 中村保男訳 新潮社  
 ユングの文明論 カール・グスタフ・ユング 松代洋一編訳 思索社  
 男女両性具有 J・シンガー 藤瀬恭子訳 人文書院  
 高等魔術の教理と發議 エリファス・レヴィ 生田耕作訳 人文書院  
 スクリャービンの作品に於ける神祕主義——「プロメテウス—火の詩」作品60の構造 新谷勝造  
 信州大学教育学部紀要 第69号  
 シークレット・ドクトリン 「宇宙發生論 上」H. P.ブラバツキー著 田中美恵子訳 竜王文庫  
 神智学の鍵 H. P.ブラバツキー著 田中美恵子訳 竜王文庫  
 象徴哲学体系II 秘密の博物誌 マンリー・P・ホール著 大沼忠弘・山田耕士・吉村正和訳 人文書院

(1991年9月5日 受理)